

北限のブナ林をぶらり



3

北海道・黒松内

緑が濃さを増しても、ブナ林の木陰は明るい。時折、ウグイスの声が上から落ちてくる。沿道にはクマの食べ残したフキも見える。

ブナ林が最も美しい6月の週末、北海道黒松内町の黒松内岳周辺の国有林で、フットパスと呼ばれる、歩く催しがあった。最高齢は84歳、九州からの参加者も含め約50人

だ。地元の森林管理署は「あくまでも試算」と前置きし、「周辺のブナ林は約3万杉あり、青森・秋田両県の白神山地を上回る」と説明した。

温帯を代表する落葉広葉樹のブナは「木」へんに「無」と書く。製材として価値が低かったからだ。町では「木」へんに「貴」の「造り字」を

使う。価値ある財産、とみなしている。

止まる列車は1日に上下とも10本に満たない。車でも札幌市や函館市から2時間以上かかる。だが、「北限のブナ林」として知られ、多くの人が癒やされに足を運ぶ。

先人たちは、伐採の危機を何度も乗り切った。1923年、いまの北海道大の教授は、市街地に近い歌才地区の92本のブナ林を「残

っているのは奇跡」と評した。5年後には国の天然記念物に指定された。

太平洋戦争末期に、木製戦闘機のプロペラ材として伐採されそうになった。別の北大教授が軍部に掛け合い押しとどめた。戦後、財政赤字の穴埋めで切られそうになった時は、住民が請願し阻止した。

87年に総合保養地域整備法（リゾート法）ができること、当時、町総務課係長だった若見雅明町長のもとに開発計画が持ち込まれた。町はぐらつかなかった。前年、住民が

「ブナ北限の里づくり構想」をまとめていたからだ。

ブナ林は美しさや保水力、生物多様性の豊かさから、欧州では「森の母」や「森の医者」と呼ばれる。町は、都市住民が週末に訪れて疲れをいやし土地の食材を楽しむ農村を目指すことにした。そのための宿泊施設や学習施設、地元食材の加工センターも整備した。観光客は15年前の3倍の約15万人。関連施設に勤める人は70人ほどで、地元にとって貴重な雇用の場だ。

町がいま力を入れているのがフットパスだ。コースはすでに3本あり、秋にはもう1本増える。整備や案内を担う主体は町民ボランティアだ。

町の里づくりを助言してきた環境市民団体「エコ・ネットワーク」（札幌市）の小川巖代表は「ブナ、地元の食材、町民とのふれあいをフットパスでつなげば、北限のブナ林の魅力は点から線になる。フットパスは地域と人もつなぐんです」と言う。

（編集委員・石井徹）



緑濃いブナの木々をチェックして歩くボランティアの人たち＝北海道黒松内町、吉本美奈子撮影

